ヨハネ14:15-24「人生の同伴者」

「『あなたがたは、わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る。わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。しばらくすると、世はもうわたしを見なくなるが、あなたがたはわたしを見る。わたしが生きているので、あなたがたも生きることになる。かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内にいることが、あなたがたに分かる。わたしの掟を受け入れ、それを守る人は、わたしを愛する者である。わたしを愛する人は、わたしの父に愛される。わたしもその人を愛して、その人にわたし自身を現す』　イスカリオテでない方のユダが、『主よ、わたしたちには御自分を現そうとなさるのに、世にはそうなさらないのは、なぜでしょうか』と言った。イエスはこう答えて言われた。『わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る。わたしの父はその人を愛され、父とわたしとはその人のところに行き、一緒に住む。わたしを愛さない者は、わたしの言葉を守らない。あなたがたが聞いている言葉はわたしのものではなく、わたしをお遣わしになった父のものである』」

遠藤周作の『深い河』という作品に、塚田という孤独な老人が出てまいります。太平洋戦争中、ビルマで行なわれたインパール作戦に従軍した塚田は、イギリス軍に追われ、密林の中を逃げ回ります。飢えと渇きのために、次々と戦友たちが倒れて行きます。そのような中、あろうことか塚田は、死んだ戦友の肉を食べることによって、命をつないでしまうのです。生きて故国に帰って来た塚田は、しかし、罪悪感によって、その後の人生をずっと責め苛まれ、そのために、アルコールに溺れ、ついに肝硬変を患って、病院で死を迎えることになるのです。

しかし、ガストンという白人の青年が、病床の塚田にひっそりと寄り添います。そうして、ガストンに心を開いた塚田は、かつて自分が犯した許されざる罪を、告白します。そうして、静かに息を引き取るのです。塚田の最後の顔は、穏やかでありました。塚田が死ぬと、ガストンは、姿を消してしまいます。不思議なことに、だれもガストンを知らず、どこへ行ったかも知らないのです。

「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる」と、主イエスキリストはおっしゃいました。

この「弁護者」という言葉のギリシャ語の原語には、「責められている人のそばに寄り添って、慰めを与える人」という意味があります。心責められ、苦しむ塚田。その塚田のそばに寄り添って、慰めを与え、看取りをし、塚田が去ると共に、自分も去って行った、あのガストンの姿こそ、「弁護者」でありましょう。

「責められているわたしのそばに寄り添って、慰めを与える人は、だれか？」これは、わたしたちにとって、最後のよりどころとなる、切実な問いであります。「弁護者」とは、だれであるか？

わたしたちは、第一義的には、主イエスキリストこそ、弁護者である、ということを、知っております。

主イエスキリストは、わたしたちとひとつに結び合うために、人の姿をとってへりくだってくださった、神であります。へりくだってくださった、と言われるのは、わたしたちの持つ同じ弱さを、主イエスキリストが共に持ってくださったゆえであります。すなわち、わたしたちの痛み、わたしたちの悲しみ、わたしたちの孤独、わたしたちの不安、わたしたちの恐れ、わたしたちの飢え、わたしたちの渇き。それらすべてを、主イエスキリストは、人として、共に持ってくださった、ということです。その上で、「平安あれ。わたしはすでに、世に打ち勝った」と主イエスキリストは、おっしゃってくださる。わたしたちは、痛み、悲しみ、孤独、不安、恐れ、飢え、渇きの極致である十字架にかかられた主イエスキリストを知っております。そして、そこから復活なさった主イエスキリストを知っております。そのキリストが「平安あれ。わたしはすでに、世に打ち勝った」とおっしゃるのを、わたしたちは聞いているのです。

これが、第一義的な弁護者としての主イエスキリストであります。

「責められているわたしのそばに寄り添って、慰めを与える人は、だれか？」この問いに対して、わたしたちは、「この人を見よ」と言って、主イエスキリストを指し示すのであります。

しかし、いまや、主イエスキリストは、弟子たちを離れ、天へ、父なる神のみ

もとへ、戻って行こうとされています。主イエスキリストは、復活なさった後、４０日にわたって弟子たちに姿を現し、その後、弟子たちが見守る中、オリーブ山の頂きから、去って行かれました。使徒言行録第1章9節から11節に、このように記されています。

「イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。イエスが離れ去って行かれるとき、彼らは天を見つめていた。すると、白い服を着た二人の人がそばに立って、言った。『ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる』」

わたしたちの魂の弁護者である主イエスキリストは、来られました。わたしたちの魂の弁護者である主イエスキリストは、去って行かれました。わたしたちは「この人を見よ」と言います。しかし御使いは、空の墓を指して言うのです。「あの方は、もうここにはおられない」　そして御使いは、天を指して言うのです。「あの方は、いつかまたおいでになる」

わたしたちの魂の弁護者である主イエスキリストは、来られました。そして、去って行かれました。そして、やがてまた来られる、と言われています。

それでは、主イエスキリストがふたたび来られるまでの間、だれが、わたしたちのそばに寄り添って、慰めを与えてくれるのだろうか？

「責められているわたしのそばに寄り添って、慰めを与える人は、だれか？」ここに「別の弁護者」が求められることになります。

「別の弁護者」について、主イエスキリストは、こうおっしゃいました。ヨハネによる福音書第14章15節から18節をお読みいたします。

「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る」

これが、主イエスキリストに次ぐ、「別の弁護者」としての聖霊であります。

この聖霊は、わたしたちと共にあり、わたしたちの内にいる、と言われています。わたしたちの内に住みたもう聖霊、すなわち「聖霊の内住」であります。

わたしたちは、さまざまな悩みや痛みに直面しながらも、人として、この世の中で、生き続けて行かなければなりません。そのことは、わたしたちが、自分の心の重荷を、自分ひとりのうちにおし隠すことによって、つとめて平穏を装って生きる、というふうにさせるのです。

だれにも語ることができない重荷、というものがあります。だれかに語ったとしても、おそらく理解されず、おそらく受け止めてももらえない重荷、というものがあります。自分のうちにおし隠して、これはもう墓場まで持って行くほかない、と思い定めた重荷、というものがあります。

しかし、聖霊は、内住したまいます。聖霊は、わたしたちの内側に深く入り込みたまいます。その上で、わたしたちの重荷を、共に負いたもうのです。

使徒パウロは、わたしたちの内側にあって、わたしたちの重荷を共に負いたもう聖霊について、ローマの信徒への手紙第8章26節から27節に、このように記しています。

「同様に、“霊”も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、“霊”自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。人の心を見抜く方は、“霊”の思いが何であるかを知っておられます。“霊”は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです」

「責められているわたしのそばに寄り添って、慰めを与える人は、だれか？」この問いに対して、わたしたちは、こう答えるべきなのです。「聖霊、わがうちにありて、共にうめきたもうなり」

いったい、この聖霊は、どこからおいでになるのでしょうか？　使徒パウロは、ローマの信徒への手紙第8章15節から16節で、こう述べています。

「あなたがたは、人を奴隷として再び恐れに陥れる霊ではなく、神の子とする霊を受けたのです。この霊によってわたしたちは、『アッパ、父よ』と呼ぶのです。この霊こそは、わたしたちが神の子どもであることを、わたしたちの霊と一緒になって証ししてくださいます」

実に、聖霊は、わたしたちを「神の子」とする霊であります。

そうして、復活の主イエスキリストこそが、わたしたちに聖霊を与えてくださるお方にほかなりません。ヨハネによる福音書第20章19節から23節に、このように記されています。

「その日、すなわち週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。そこへ、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。そう言って、手とわき腹をお見せになった。弟子たちは主を見て喜んだ。イエスは重ねて言われた。『あなたがたに平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす』　そう言ってから、彼らに息を吹きかけて言われた。『聖霊を受けなさい』」

わたしたちの心は、今日、恐れのために、閉じているでしょうか？　わたしたちの心は、今日、自分だけで抱えている重荷のために、閉じているでしょうか？「責められているわたしのそばに寄り添って、慰めを与える人は、だれか？　いや、だれもいないのだ」という思い込みのために、わたしたちの心は、閉じていないでしょうか？

わたしたちの心が閉じているにもかかわらず、しかし、そこへ、主イエスキリストが来て真ん中に立たれます。そして、言われるのです。「あなたがたに平和があるように」

これは、ただの「平安あれ」ではありません。この「平安あれ」は、痛み、悲しみ、孤独、不安、恐れ、飢え、渇きの極致である十字架にかかられ、そこから復活なさった方が言われる「平安あれ」であります。

この「平安あれ」はまた、「あなたを決してひとりぼっちにはしない」という決意としての「平安あれ」であります。すなわち、「わたしは父にお願いしよう。父は別の弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてく

ださる。この方は、真理の霊である。世は、この霊を見ようとも知ろうともしないので、受け入れることができない。しかし、あなたがたはこの霊を知っている。この霊があなたがたと共におり、これからも、あなたがたの内にいるからである。わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない」という「平安あれ」であります。

今日わたしたちは、「別の弁護者」である聖霊を受けるようにと、主イエスキリストによって、招かれております。それは、わたしたちを恐れさせる招きではありません。わたしたちを神の子とするところの、「平安あれ」の招きであります。

「責められているわたしのそばに寄り添って、慰めを与える人は、だれか？」
実に、聖霊こそが、そのお方であります。実に聖霊こそが、わたしたちの人生の永遠の同伴者であります。そのお方を、わたしたちの内へ、お迎えいたしましょう。祈りましょう。

祈り

わたしたちの主イエスキリスト。
あなたは、わたしたちのために父なる神にお願いをしてくださり、慰め主なる聖霊を、わたしたちに注いでくださっていることを、心から感謝いたします。
父と子から出て、わたしたちのもとへ、いまおいでくださっている聖霊。わたしたちは、心の扉を開いて、あなたをお迎えいたします。どうかお入りください。聖霊、わたしたちを満たしてください。
聖霊。わたしたちは罪を犯しました。それを、いま、告白します。どうか御子イエスの血によって、わたしたちを赦し、わたしたちをきよめてください。
聖霊。わたしたちもまた、わたしたちに罪を犯した人を、赦します。どうか、自分が赦されたように、自分も人を赦すものとならせてください。
聖霊。わたしたちの心のうちにある重荷を、あなたが共に負ってください。わたしたちが、うめくとき、あなたが共にうめいてくださって、執り成しの祈りをささげてくださることを、感謝いたします。
わたしはひとりぼっちではなく、聖霊、いつでも、どこでも、どんなときでも、あなたと共に生きているということを、想い起こさせてください。
主イエスキリストの御名によって、お祈りいたします。
アーメン